

## 排除と生存をめぐって

——釜ヶ崎の可能性を考える

栗原 彬

法学部創立五〇周年ということですが、一九六四年六月に発行された『法学周辺』第八号に宮沢俊義さんが「差別」という論文を寄せています。これは言うまでもなくキング牧師に率いられたアメリカの公民権運動を背景にした論文です。草創期の法学部がどこに関心を持っていたか、それが現在までどのように引き継がれているかといったことを見る上で起点に立つ論文だと思います。やはり社会的な排除、その現実を目をとめる。社会科学は法学であらうと政治学であらうとそこに立って、そこから研究を始める。それが法学部の五〇年を通じての一つの姿勢だと思っています。

その意味では、淡路さんの報告された環境の問題と併せて、社会的な排除の問題とその場所に立ち上がる生存ということ、そういうところに一つの現実がありますので、そこに焦点を据えてお話ししたいと思います。

## 社会的排除と生存のエッジ

社会的な排除とそれに伴って生じてくる生存への欲求、そうした問題群を孕んでいる現場をエッジという言葉で呼ぼうと思います。エッジとは先端とか切っ先という意味です。市民社会の中の問題群がある現場です。それは排除と生存をめぐる危機的な現場であるわけですが、同時に、そういう受難の底から立ち上がってくるものがあります。いま東京都写真美術館でセバスチャン・サルガドの写真展が開かれています。アフリカの難民たちを主に取り上げている写真ですが、その写真が示すように、難民たちの受難と受苦の底から、もうこれ以上生きられるかという底から、立ち上がってくる人間のデイクニティが見えてきます。

エッジはそういう危機的な問題を孕んでいます。確かに排除と生き難さという問題を含んでいる場所ですが、同時に、そこに新しい生の可能性がある。そういう場所をエッジと呼ぶわけです。

エッジは近代社会に限らず前近代社会からあります。共同体があるところには常にエッジが生じると言えるでしょう。その意味では、被差別部落、あるいは人種、性、宗教、職業、病气、障害等々は前々からあるカテゴリーですが、これらの社会的な排除は新しい形式を通してむしろ補強されているところがあります。ですから、「公害問題が終わったとは言えない」「公害問題は終わらない」と言うのと同じように、「社会的な排除あるいは差別は終わらない」ということが言えます。

たとえば「文化の違い」という名によった人種主義がまかり通っているし、性の「間接差別」があります。雇用の際に男と女で区別をしてはいけないことになっている。けれども、ある能力において採用するという建前で、そこに隠れた性差別が現に進行している。

とりわけいま問題になっているのは、地球市場化という問題と労働の再編成、日本で言えば労働者派遣法以来の

問題です。そうした労働市場の再編成、自己調整的な自由市場への新自由主義的なコンセンサスが重なり合って、私たちがいま現に当面しているように、労働と所得が分断されている、労働自体も縮減している中で、エリート層ないしは富裕層と下層労働者の二極分化が生じています。

この問題は社会的な格差という言い方でとらえられますが、同時に貧困の問題としてもとらえられています。従来の被差別部落、人種、性による差別は市民社会の外への排除、あるいは市民社会の周縁への排除であったといえる。しかし、いま私たちが当面している貧困化という問題をめぐる状況は新しい状況だろうと思います。市民社会内部の排除の問題です。それが従来の社会的な排除とリンクしていく。そういう状況だろうと思います。

市民社会内部の広範な市民層に及ぶ新しい社会的な排除が現に進行しているということです。ここから私たちは問題を考えていく必要があるでしょう。つまり、人ごとではないのです。市民の誰もが貧困化の波に巻き込まれる可能性があるということなのです。

### つながりの貧困／つながりの政治

ここで貧困率と言われているものに目を止めたい。日本政府が初めて発表したデータがあります。二〇〇九年一〇月二〇日に長妻昭厚生労働大臣が発表した、日本の相対的な貧困率です。国民の所得分布の中央値の半分に届かない世帯を相対的な貧困と定義します。そうすると、日本の全国の相対的な貧困率は一五・七%です。これはOECD加盟国三〇カ国の中で四番目に高い位置にあります。つまり、日本は相当な貧困国であると言える。しかも日本の子供の貧困率が一四%、高齢者の貧困率が二一%、ひとり親家庭の貧困率が五九%、すべてOECD平均を大きく上回っています。ひとり親家庭の貧困率は、OECD平均では三〇%です。日本は五九%ですから、大変な貧困率の高さだと言えるわけです。

ここから一つは政策課題の問題が出てくると思います。それから運動の課題、そして個人が負わなくてはならない課題、三つのレベルが考えられます。私は個人が負わなくてはならないレベルで考えていきたいのですが、政策課題として言わなくてはならないことがあります。それは、相対的な貧困率を引き下げるといふ問題です。

たとえば数値目標を設定することになると思います。それを大きな課題としてとらえれば、ゼロ成長の下でいかにして市民社会を保つか。ゼロ成長の下でも何とかやっていけるという脱近代モデルの構築ということが、やはり大きな課題になるわけです。これをめぐって詳しくお話しする余裕はありませんが、再分配政策は欠かせないところでしょう。それから、環境、サービス、あるいは知的所有権の問題、アジアへの志向性といったことが総合的に政策課題の中に絡んで出てきます。

中期的な課題としては、そもそも日本の貧困率が高い理由は所得の再分配機能が他のOECD諸国に比べて弱いということがあります。そうすると、所得の再分配機能を高めることが必要になります。これもさまざまありますが、たとえばナショナルミニマムをしつかりと押さえていく、低所得層の暮らしの重点的な回復を考えていく必要があります。それはたとえば全労働者に雇用保険を適用すること、パートの賃金を引き上げることなど、いくつも問題があります。これはいずれ非貧困世帯から貧困世帯への所得移転を伴うわけです。増税、ワークシェアリングといったことがやはり必要になってきます。

そうした問題に加えてもう一つ大きいのは、企業、とりわけ大企業の持っている、私は敢えて全体主義的と言いたいのですが、全体優先、組織維持の優先、コストカット優先といった政治文化です。これを変えていく必要があるだろうと思います。たとえば「サービス残業」などという概念自体が平気でまかり通っているのはおかしい。そういうことが中期的な課題の中にやはり含まれてくるだろうと思います。

政策課題にもまして重要なのは、運動の問題であります。市民社会内部の排除という新しい問題とそれに対応す

る運動の形が考えられなくてはいけないだろうと思います。その時、釜ヶ崎で現に進行していることがとても見やすい一つの先駆的な形態を示しているので、今日はそのことをお話ししたいと思っています。

二〇〇八年暮れに日比谷公園に生まれた派遣村の村長を務めた湯浅誠さんが、一九九五年に野宿問題の運動を始められています。その時湯浅さんが考えていたのは、野宿者性です。野宿者のアイデンティティにこだわって運動を進めていたといえます。実際、六八年以降の社会運動は、マイノリティがそれぞれの自己アイデンティティの回復あるいは獲得を目的としました。ですから、障害者自立運動、ウーマンリブ、アイヌの運動など先住民族の解放運動、水俣病闘争、学園闘争等が簇生したのですが、それぞれのアイデンティティの主張ということがあり、そのアイデンティティ回復ということで言えば、反差別ということが同時にセットになって出てきていたわけです。湯浅誠さんはこれをアイデンティティ立脚型の運動と言います。確かに一九六八年以降は、それが必要な時期であったといえます。

ところが、現代日本の貧困化は、一つは二極分化です。ですから、下層の貧困化という問題があります。しかし、第二に貧困化は、障害者の貧困化、女性の貧困化、ひとり親家庭の貧困化、高齢者の貧困化、派遣労働者の貧困化、中小企業の貧困化、商店主の貧困化など、挙げていくときりがありません。それぞれの社会的な領域に貧困の領域が拡大している。市民社会内部に横広がりになっている側面があります。ボトムばかりではなく、同時に横広がりでの貧困化という現象が生じています。

これをNPO法人「もやい」の理事長を務めている稲葉剛さんはつながりの貧困と言います。非常にうまい言い方をしています。単に職を失ったというだけの話ではないのです。住まいと食事、家族、友人、地域、医療、福祉、子どもの教育など、その人をめぐるつながりの全体が貧困化するという状況であります。

そうすると、つながりの貧困に対して、言ってみればつながりの運動、つながりの政治、市民政治の次元で言え

ばつなりのポリティクスが必要になってきます。これからの社会運動は、アイデンティティ立脚型ではない。アイデンティティ立脚型は、言い方を換えればタコソボ型の運動ということになります。そうではなくて各分野の運動が横つながりで横断的にエッジの問題と取り組む。そういうステージにいま踏み出す必要が出てきています。そういう目で見れば、ネットワーク型の運動がいま本当に必要になってきています。

そういう見方で言うと、水俣のもやいの運動、患者たちが市民たちと連携するということが出てきています。石牟礼道子さん原作の能「不知火」の水俣奉納上演で、チッソに協同での取り組みを呼び掛けた。緒方正人さんの言いかだと、課題責任を共有するということになる(緒方正人・栗原彬〔対談〕「水俣病を超えて未来へ」課題責任を背負う)〔新作能「不知火」ワークシヨップ二〇〇四年五月一日〕『魂うつれ』第一八号、二〇〇四年七月)。加害者、被害者と二極図式で考えることが裁判などではもちろん必要になります。しかし、今はそうではなくて、もうチッソも人として肩を並べていこう。そうすると、加害と被害という二極図式を超えて、人と人として奉納上演に取り組もうという横つながりの姿勢が生まれてくる。そういうことがすでに進行しています。

釜ヶ崎の場合にもそれがよく表れています。そのことをお話ししていきたいと思えます。

### 「溜め」と「目地」

政策課題、運動の課題、そしてエッジに立つ個人の課題です。当事者の課題。このように考えると、当事者にとっては大らかな政策課題を待つてはいられません。現に生きるか死ぬかという排除と生存の現場に立っている。その人たちはどのようなことが必要かと言えば、湯浅誠さんの言い方だと「溜め」が必要になる(湯浅誠『反貧困』岩波新書、二〇〇八年)。手近な条件を用いた手仕事、ブリコラージュとして、一つは重層的な排除や生きにくさを解きほぐす、生の形を作り直すことを通してそれが実践されていく。その際に支援される者、支援する者双方とも、

アマルティア・センの言い方だと、生活の潜在能力が稼動する。湯浅さんはそれを個人の「溜め」と呼ぶ。そういうものが必要である。確かに金、あるいは家族、友人、自分自身に対する誇り、自信といったものが「溜め」として必要です。

しかし、「溜め」だけではダメだろうと思います。「目地<sup>めじ</sup>」という言葉を使いますが、「目地」とは建築用語です。木と木の組み合わせ部分で、そこに遊びがある。余裕がある。そうでないと建築は成り立たないのです。たとえば引き出しを考えてみると、引き出しの枠があります。そして引き出しがあります。余裕、遊びがなかったら、引き出しが引き出せません。ですから、必ずそこに余裕、遊びが必要になります。その遊びの部分を「目地」という言い方をします。

この「目地」、自然や他者との関係、協働性、遊び、つながり、セイフティネット等々が必要になる。とりわけ人間と人間との間の「目地」が必要になります。

湯浅誠さんの言い方ですと、頑張るためには「溜め」が要る。生きるためには「目地」が要る、と私はそれに付け加えたいのです。「溜め」と「目地」がエッジに立つ個人や当事者にとって欠かせないことになります。こういう視点を持って釜ヶ崎の可能性を見てみたいと思います。

まず、釜ヶ崎は小字の釜ヶ崎から始まっています。明治末期の木賃宿の発祥地です。東入船町、現在の住居表示で言えば萩之茶屋一丁目に相当しますが、そこに住んでいる日雇い労働者や住民、支援者たちは釜ヶ崎と呼びます。大阪市が一九六六年に同和地区として線引きした時にあいりん地区という言い方をしました。学者たちはあいりん地区という言葉をちよつと替えてあいりん地域という言葉方をします。これは全く姑息な使用法だと思えます。あとは西成という言い方があります。大阪市の行政区としての西成区です。西成区民以外の外部者が西成と呼ぶことがあります。西成区民は西成という呼称を好まない。結局、釜ヶ崎という言い方が一番親しいわけです。

地図で言えば、釜ヶ崎、あいりん地区、西成といった地名が重なり合い、しかもずれている。そのように言えると思います。

釜ヶ崎は一九六一年の第一次暴動から始まって、ほぼ五年おきに大暴動が起こっています。日本の高度経済成長を支えた日雇い労働者たちが繰り返しているいろいろな意味で自分たちの人権にかかわる問題に直面して異議申立をするという形で、暴動が繰り返されてきています。二〇〇八年に第二四次の釜ヶ崎暴動が起こっています。

#### 釜ヶ崎、異交通の可能性

このような釜ヶ崎で、釜ヶ崎の可能性を考えるとという時、第一に挙げたいのは「もう一つの交通」です。私は交通のあり方として単交通、反交通、双交通、異交通という区別をしています。単交通はたとえば命令みたいなもの、一方通行です。反交通は交通を断つことです。双交通は相互的な交通ですが、同一のコードあるいは文化を共有している者同士のコミュニケーションです。私たちがよく言うコミュニケーション、つまりハーバースマの意味のコミュニケーションです。双交通は多数派のコードを強化することに終わります。

異交通というもう一つの交通では、コードが異なる者同士がコミュニケーションする。場合によっては、言葉だけでなく身体、身振りといったことまで含めての交通になります。ここに一つの新しい形が考えられます。

釜ヶ崎のまち再生フォーラムというフォーラムが一九九九年に生まれています。これが先ほど申し上げた横つながりを作り出す先駆的な形態だったと思います。ありむら潜という漫画家で、かつ西成労働福祉センターに勤務している人が、毎月第二火曜日という日を設定して、釜ヶ崎のまち再生フォーラムを主催して、今に至るまで続いています。その場は、オープンフォーラムで異交通の場所になっています。立場が違う、イデオロギーが違う、生活の形態も違う人たちが集まって、つながりを探る。そういうリーダーたちの顔つなぎの場所になってきました。異

交通は多少とも脱アイデンティティを伴うので排除のない新しいつながりを生み出します。

たとえば労働組合と簡易宿所は本当に水と油のように敵対していたわけですが、フォーラムに参加することで両者のいい関係が生まれていきます。そのことがサポータータイプハウスと呼ばれるものを作り上げていきます。

フォーラムの狙いは、現に日雇い労働者たちが野宿をしている。その野宿者に対する緊急対策と、それを街を再生していく、街づくりをしていくということにつながっていくという発想です。ですから、野宿者の救済はそれはそれ、そして街づくりはまた別という今までの発想と違うやり方です。野宿者を救済することが即街づくりにつながっていく。そういう発想をとることができたのです。

このフォーラムは元々は釜ヶ崎居住問題懇談会が発点になっています。これは市民たちの学習サークルです。当時、釜ヶ崎に関心を持つ人たちが一九九六年にイスタンブールで開かれた国連人間居住会議ハビタット2の理念や決議を学習サークルで勉強して、それを釜ヶ崎に適用できないかと考えていく。それで、釜ヶ崎居住問題懇談会が事務局になって、釜ヶ崎のまち再生フォーラムを設立します。それを一〇年間やってきました。

その間に、「居住の階段論」という図を作り上げることができました（ありむら潜「棲み処<sup>（ハビタット）</sup>としての釜ヶ崎のまちづくり」『日本ボランティア学会誌二〇〇七年度』日本ボランティア学会、二〇〇八年六月）。また逆に、このような図を作ることでは街づくりの一つの方向性が、野宿者の救済とセットになって展開されて見えてくるわけです。下からいくと、野宿からシェルターへと上がっていく。シェルターというのは本当にひどいもので、二段ベッドがずらっと狭い空間の中にただ無機的に広がっています。ですから、そこではひたすら寝るしかない。これは決して野宿からの脱出にはつながらない。それから、自立支援センターがあり、厚生施設があり、簡易宿泊所がある。ここまでは施設収容型の階段です。

それ以降、福祉アパート、サポータータイプハウス、マンションへと階段を上っていくようにする。サポータータイプハ

ウスは、ホームレスを受け入れるケア付きハウジングであると言えます。これに入るために保証人も要らないし、保証金も要らない。しかも二四時間のケア付きであるという手厚いものですが、このサポーターティブハウスができたお陰で、その前後の階段が整っていく形になりました。居住を確保するということはすごく重要です。そのことによって生活保護を受けることができます。そのようにしてここに住む人たちの生活改善が著しく進行したわけです。

釜ヶ崎のまち再生フォーラム自体が一つの異交通の場所ですが、実際、居住の階段論が進行し、それに伴って、同時に異交通の場所を確保しようとするいくつものグループ、NPO法人が生まれます。

たとえばコールドームは上田假奈代さんという詩人が主宰するNPOです。カマン！メディアセンターも同じです。誰にも開いていて、ホームレスの人たちがそこに気楽に寄れるような場所です。非常に異なる人たちだけども、その人たちがそこで話ができるような場所を作っていくことになりました。

ビル・ゲイツの言葉を引きます。「反応速度が生死を分ける。戦場でも、市場でも」。戦場でも市場でも実際にボタンを押す反応速度が生死を分ける。このような言葉で考えるのだったら、釜ヶ崎の場合は逆に応答のゆっくりした時間こそが生死を分けると言ったらいいでしょう。そもそも応答があるかないかです。反応速度の問題ではありません。異なる他者の呼びかけへの応答、つまり異交通が、新しいつながりを生み出します。

イヴァン・イリイチの道具のスペクトルはよく知られていますが、片方にホームを成り立たせる極があり、他方の極には地球市場と言ったらいいいでしょうか。その間の道具の配列をスペクトルとして考える（イヴァン・イリイチ〔渡辺京二・渡辺梨佐訳〕『コンヴィヴィアリティのための道具』日本エディタースクール出版部、一九八九年）。ホームのほうは身体性に富んでいるもの、手で使えるようなものです。鉛筆、絵の具、電話、自転車など。コーヒーマシン、散歩道、公園、パソコンといったものもホームの側です。地球市場の側には、多国籍企業、金融資本、原

発、ゲノム計画、バイオテクノロジー、核体制といったものが配置されます。釜ヶ崎の異交通を支えるのは、やはりホームの側の道具であるわけです。

釜ヶ崎の交通の基盤で考えれば、脱アイデンティティでやっていくしかありません。トランスナショナルですし、トランス都道府県です。国籍や戸籍を超えた人たちの集まりの場所です。路上の人々の生き方のコードを考えていくと、そこにある種のスピリチュアルライフがあります。そのことを見落とすことはできないと思います。そういう異なりが資源であり、異なる人々がしかし奥底で抱えている人間のダイグニティといったものが異交通の基にあると言えます。

### つなぐアート

第二の可能性はアートです。アートは世界を見、世界を映す、世界をつなぐと言えらると思います。他者の呼び掛けに応答すること、自分という存在を表現すること、人と人、人と世界をつなぐことです。

平均年齢が八五歳、元々は野宿をしていた人たちが「むすび」という紙芝居劇団を作ります。紙芝居劇と言つて、紙芝居に合わせて自分たちも劇的な所作をするのですが、最新作は「ねこちゃんの人生スゴク」です。

ぶんちゃんという女の子とねこちゃん、二人は仲良しなのですが、ねこちゃんが迷子になってしまう。ぶんちゃんを見失う。出会ったさまざまな動物たちに尋ねながらぶんちゃんを探す旅が紙芝居で描かれています。

最初に蟻さんと出会おう。蟻さんはぶんちゃんの居所を直接教えないで「歩き続けるといいよ」と言う。コアラ君と出会うと「ゆっくり行くといいよ」と言う。いろいろな動物たちと出会うのですが、ぶんちゃんがどこにいろとは教えない。カラスのくろちゃんと出会うと「ねこちゃん、屋根の上に乗ると見えるよ」と教えてくれる。

この紙芝居はなかなか意味が深いと思います。これはソムリエ論の構図で見ることができます。『田崎真也のサ

「ピエスの極意」(新潮文庫)というソムリエの人が書いた本があります。たとえばバーにホストがゲストを連れてやって来ます。その時、ソムリエはゲストに直接もてなしをしてはならないと言うのです。もてなしは歓待と言い換えてもいい。ホスピタリティです。ホストがゲストを歓待する。バーに一人やって来る。その場合であっても、一人の客が自分をもてなす。そういう構図だと考えていただくといい。ソムリエは、ホストがゲストをもてなすのをアシストすることができるだけだと言っているのです。

『ねこちゃんの人生スゴク』で言えば、動物たちがぶんちゃんはここにいるよと直接指示するわけではない。ねこちゃんがぶんちゃんと出会う、再会する。動物たちはそれをアシストすることができるだけだ。アシストすることだねこちゃんの主体性を立ち上げていく。そんなことが言えます。まさに日雇い労働者たち、八五歳以上の釜ヶ崎の住民たちがやってきたことの一つの表現の形です。

### 生命に直接的な公共性

第三に公共性という問題があります。新しい公共性、「もう一つの公共性」と言ったらいいと思います。一九三六年スペイン生まれの聖母被昇天修道会シスターのマリア・コラレスさんからの聞き書きですが、元旦の夜、路上で暮らす男が通りすがりの男から一枚の一万円札を受け取る。一万円札を手にするなどめったにないことですから驚いて、男は使い途を考えます。夜が明けて男は酒とたばこを食料を買って、同じく路上で暮らす男たちと分け合った。少し残った小銭で自分の衣服を洗濯した。「いいことがあった」とうれしそうにマリアさんに話しをしたということが記録されています(NPO法人ココルーム編『記憶と地域をつなぐアートプロジェクト ころのたねとして釜ヶ崎二〇〇八』大阪市立大学都市研究プラザ、二〇〇九年)。

分かち合いです。路上の生活では分かち合いがごく普通に行われているということです。

マリアさんが夜回りで食料を配りながら街を歩く。野宿している人たちに食べ物を置いていく。リヤカーを停めてその上で寝ている人がいた。マリアさんはその人を起こさないようにそっとおにぎりを置いて立ち去った。しばらくして同じ場所を通り掛かると、男は目を覚ましていた。「さっきここにおにぎりを置いた」と言うと、「そんなものはなかった」と男は答えた。「では、次に配る時は見えないように隠しておく」とマリアさんが言うと、男はマリアさんの顔をじっと見て言った。「何でそんなことを言うのか。たまたま通り掛かった人がお腹がすいていた、だから食べた、それでいいじゃないか」。

市民社会の所有権前提の公共性の次元では、これは盗みになるわけでしょう。しかしそうではないのです。公園、道路など小さな場所で行われている小さな公共性ということがあります。硬い言葉で言えば、共生をめぐる公共性のハビトゥス（慣習行動）がそこにあると言っていると思います。

一九七〇年代の初めごろに伊達火力阻止の運動がありました。北海道の伊達に火力発電所を造ろうという話です。裁判官が現地視察に訪れた時、農民と漁民が次のように言ったといえます。安全でおいしい食べ物を提供することは電力よりもっと大切な公共性ではないのか、と。つまり、北海道電力は電力は公共性という。文明化、近代化に結びつく公共性、という葵の御紋みたいな提起の仕方をしたのです。それに対して、農民たちが、安全でおいしい食べ物を提供することは大切な公共性ではないのかと言った。公益と公論と公的な決定、三つの要素を含んでいる公共性の次元の中で言えば、もう一つの公益です。

さらに時間を遡れば、ちようすけゆき長祐之の名前が出てきます。淡路さんが先ほど足尾山地の滅亡した松木村の写真を出してくださいましたが、古河市兵衛が足尾銅山経営に際して、銅を精錬する時の燃料に立ち木を使用しました。また煙害で山には全く立ち木がなくなってしまうと、渡良瀬川が大洪水を起こします。明治二三年八月に大洪水が起り、足利・佐野地方の稲が腐り、桑もまた枯死、魚も全く減ってしまいます。これは足尾銅山による鉱毒ではない

かと、実地調査と統計データによって、最初に言ったのが長祐之です。

長祐之は足利出身、東京専門学校、現在の早稲田大学の学生でした。後に足利町長になりますが、この人が『下野新聞』明治二三年一〇月一日号・一二日号に投書します。「私益をもって公益を害すべからず」。私益とは足尾銅山です。銅の精錬は公共性と政府は言っていたわけですが、それに対して、そうではない、それは私益であると言う。鮎漁で鮎を獲ること、おいしいお米を作ること、そういうことが公益だと言うのです。

鉱業が一国の公益を助けるにしても、それは私益の余りでやることであってその意味では間接的である。それに対して、漁民のもたらず公益は直接的である。鉱毒という言葉を初めて使ったということも重要ですが、生に直接的な公共性という考え方を提起しています。間接的な公共性に対して直接的な公共性が優先する。これはまさに排除と生存のぎりぎりのエッジに立つ公共性の一つの問題提起です。このようなことが実際に明治二三年一〇月一日、一二日の新聞への投書で行われています。

衆議院議員の田中正造が被害を受けた足利郡や群馬県の邑楽郡を調査して、「足尾鉱毒の儀につき質問書」を初めて政府に提出したのはその翌年のことです。明治二四年一二月一八日、第二帝国議会で初めて提出しています。それに先立って長祐之という一人の学生が問題提起をしています。

これが釜ヶ崎の可能性、もう一つの公共性ということにつながっています。それは小さな公共性です。しかし共生という比類ない公益性であるし、人間が生存することのぎりぎりの場所に立つ大切な公共性です。

### 共生への社会科学

排除と生存をめぐる釜ヶ崎の可能性を考えてきましたが、このようなことを問題にしていく人たちがまさにエッジの現場に現れています。それは大きく三つぐらいに分かれると思います。受難者や受苦者自身が社会科学を持

ち、アートを持つ。たとえば川本輝夫さん、水俣病者ですが、ポロポロになるぐらい六法全書を読み込んで、水俣病闘争をリードした人です。女島の漁師で水俣病者の緒方正人さんは極限思考をする人です。

それからボランティア、市民活動、NPOの社会科学ということが言えます。派遣村の村長をつとめた湯浅誠さんもそうです。稲葉剛さんはNPO法人もやいの理事長です。湯浅さんは東大の政治学の大学院で学んだ人です。稲葉さんは東大の教養学部を出ている人です。障害者のアートを起こしてきた播磨靖夫さんもいます。宇井純さんは、自分がやって来たことは生涯を通じてボランティアであるとはっきりと自己規定されています。

そして、若い人たちですが、車椅子を押す社会学者たちが学園の中に現れています。社会のエッジに立つ社会科学とアート、このような広がりが出てきています。学園の中でも、たとえば釜ヶ崎へ行くと、実際に釜ヶ崎の市民活動に学生たちが入り込んでボランティアでやっています。そういう意味でのソーシヤル・アクション、あるいはアクション・リサーチということが進行しています。

私は釜ヶ崎のコルムズの職員で原田麻以さんという明治学院大学を卒業して一年目の人と一緒に夜回りをしました。路上で段ボールに囲まれて野宿をしている人におむすびとちよつとしたおかずと飲み物を添えた袋を差し出すのですが、彼女の後ろから私とその袋を持っていったわけです。そうすると、彼女は腰を低めるのです。つまり、上からあげるよという姿勢だと、受け取るほうの身になるとすぐくつらいものがあるわけでしょう。同じ目線、同じ位置に立つのです。それで「夜回りに来ました、おむすびはいかがですか」と言う。彼女がそう言うとき私が袋を渡すのですが、その時袋を渡しながら私は思わず「ありがとう」と言ってしまうました。

「ありがとう」という言葉が出てきた。普通はもらうほうが「ありがとう」と言います。野宿している人たちは必ず「ありがとう」と言う。本当にうれしそうに「ありがとう」と言うのですが、渡すほうの私が「ありがとう」と言ってしまうた。これはどういうことなのかと後で考えましたが、思わず出てしまった言葉です。

原田麻以さんの姿勢がその言葉を引き出したのです。ものを野宿している人に差し上げるといことが、彼女にとっては苦しい。それを踏み越えて差し上げる時の姿勢です。それは昔からある歓待と贈与の形です。

作家の五木寛之さんから聞いた話ですが、白山から京都の街に冬場に下りてきて、門付けといって、商店の門口に立つ。黙って立っていると、商店主がお金などを包んで、商店主のほうに「ありがとう」と言って、白山から来た人に渡す。それが門付けの原則です。もらったほうは「ありがとう」とは言いません。そんなことも思い出ししました。こういうことが釜ヶ崎で進行しています。

時間になりました。どうもありがとうございました。（拍手）